

質的研究は科学としてエビデンスをもたらすか

高木 廣文（東邦大学医学部看護学科国際保健看護学研究室教授）

1. はじめに

量的研究は客観的実証主義，質的研究は社会構築主義などの相互に異なる認識論を基盤とするため，普通の考えでは相互了解は困難である。そのような主観 - 客観問題による信念対立を克服するためのメタ理論として，西條は構造構成主義を提唱した¹⁾。量的研究と質的研究の信念対立の問題は，研究目的に応じて関心相關的に研究手法を選ぶことで解決可能である^{1, 2, 3)}。しかし，質的研究のテキスト解釈の妥当性と，研究結果が科学的エビデンスになるのかという疑問は，それだけでは解消されない。

ここでは，まず量的研究と質的研究を現象学的に捉え直し，構造主義科学論^{4, 5)}における科学の定義からみて，それらが同一の基盤に立っていることを説明し，次ぎに言語解釈の問題を考察し，最後に質的研究の科学的エビデンスについて考えてみたい。

2. 量的研究と質的研究の対象による区分

池田が指摘するように，科学のために外部存在の実在性を仮定する必要はない⁴⁾。一方，我々に立ち現れる現象の実在性は疑いようがない。現象は我々の心の内部世界で認識するものではあるが，外部世界の実在性に関してその明証性は疑えても，現象を疑うことはできない。

竹田は認識対象の本質として，1)自然事物（thing），2)事象（ことがら），3)心的存在（こころ）の3区分をしている⁶⁾。紙面の都

合上，以下のようにまとめてみた。

自然事物は，「一般利用可能性，対処可能性」を本質として持ち，「類身体性」（身体の共通性，共約性）という公準に基礎づけられているために，一般に常に高度な「共通了解」（客観性）を確保されている。

事象は，社会的事象を指し，ある事象の関心相關的「意味連関」の把握とされている。約束の遵守，成功，欺瞞，大事件，犯罪などとして，一定の共通了解として認識するが，これらは社会的公共性の平均的認知に基づくため，異なる社会では異なる認識・把握の形を取り得る。

心的存在は，認識対象として三重の对象的本質をもつ。第一に，「利用可能性，対処可能性」としての对象的本質をもつ。第二に，諸対象を常に「対象化する」という存在本質をもち，さらに常に自己存在を「対象化する本質」でもあり，人間は絶えざる「自己対象化」的存在，「自己理解」する存在として規定される。第三に，他の人間的存在に対する対象化的本質でもあり，他者関係によって自己存在を対象化されつつ規制されている対他的「自己意識」である。

以上の竹田の議論を踏まえ，現象の本質論から，私は自然事象（モノ）を研究対象とするのが「量的研究」，心的存在の中に生起する現象（コト）を扱うのが「質的研究」であると区分している。社会的事象は，共通了解の仕方がその社会に依存する点から，主観的に社会的事象を捉えれば質的研究に，数量的

に現象を把握すれば量的研究になり、どちらの方法も適用可能である。

3．構造主義科学論と質的研究

池田によれば、「科学は同一性（構造や形式）の追求」である⁴⁾。そして科学理論（モデル）は、目的とする現象を最も上手に説明できるものがよいモデルとされる。さらに、物質と物質の関係性を記述できる理論を持つ分野を、「厳密科学」として分類している⁵⁾。物理学、化学、生化学などは厳密科学であり、医学領域の大部分は非厳密科学である。心理学や精神医学などは本質的に非厳密科学であり、看護学も非厳密科学の一つである。

ただし、厳密科学か非厳密科学かは研究対象の特性によるものであり、どちらも科学であり優劣はない。モデルの記述は、研究対象によって数式や記号によるとは限らず、言語による記述でも構わない。例えば、「 $E = mc^2$ 」というモデルもあれば、「タバコの吸いすぎは健康に悪い」というモデルもある。

目的とする現象の記述に、どのような方法を用いるかは恣意的であり、いくつも対立するモデルがあってもよい。ただし、上記のようにモデルの評価は現実の現象の説明が上手にいくかのみ依存している。構造主義科学論では、「本当のモデル」や「真実のモデル」の存在を考えない点にも注意が必要である。

量的研究はモノを対象とする科学であり、質的研究はコトを対象とする科学である。構造主義科学論の立場からは、それらの違いはモデルの記述に数式や記号を用いるか言説を用いるかの違いであり、いずれも目的とする現象を説明するためのモデルを作ろうとする点では同じである。

4．言語の信憑構造と解釈の妥当性

質的研究も量的研究と共に科学研究であるとしても、それが全ての質的研究の結果が等しくエビデンスのあることを保証するもので

はない。これは、量的研究にもエビデンスに複数の水準が設定されていることから明らかである。

最初に、質的研究での言語テキスト解釈の妥当性への疑問の解消を図る必要がある。言語テキストの解釈での問題は、研究者の解釈と情報提供者の言ったことの意味内容が一致するかということである。

あらゆる現象は言葉によって始めて認識が可能になるのだが、言葉は多義的であり、文脈依存的でもある。他者の言ったことを正しく解釈していると判断する根拠はどこにあるのだろうか。哲学的には、「認識問題」と「意味理解」の問題であり、「確信の成立」についての条件は何かを問うことになる⁷⁾。

竹田は、「言語の信憑構造」として対象（現象）、発語者（話し手）、言語表現、受語主体（聞き手）の各間に信憑関係が存在することで、認識了解と意味理解の確信が成立している⁸⁾。そして「確信」もまた総じて到來的な本性をもつものである、としている⁹⁾。要するに、実際の会話では、普通は言っていることの意味は自然と分かる、ということである。確かにその通りなのだが、それは何故なのか。

ソシュールによれば、ラング（一般的言語）は、パロール（発語）によって社会的に構成されるシステムであると同時に、個人の内部世界（すなわち頭脳の中）に構成されたシステムである¹⁰⁾。したがって、「ある現象に関しての認識構造は研究者と情報提供者で同一もしくは同型である」ことが了解できれば、研究者が情報提供者から得た言語情報を正しく解釈できることになる。さらに、池田が指摘するように、「同一のラングをもつ個人は、ラング以外の内部世界においても、同一構造をもつに違いない」¹¹⁾などの並行性の原則を暗黙の前提としている。

言語や認識構造に関するこれらの前提は、原理的に証明は不可能である。しかし、我々

はこれらの成立に関して共通理解を得ることはできるだろう。なぜなら同一の社会においては、

1) 情報提供者と研究者の間で会話が正しく成り立つ。

2) 真善美に対する価値観に違いがない。

3) 喜怒哀楽などの感情面での違いがない。

という思いは、多くの人たちに了解されるのではないだろうか。もしも、大きな価値観の相違や感情面での差を感じる場合には、認識構造の同型性の仮定が成り立っていない可能性もあり、言語解釈はより慎重に行う必要がある。

もう一つの傍証は、「そんなことは分かっている」という質的研究の結果に対するよくある指摘である。何故そのような指摘ができるのだろうか。タイでHIV/AIDSに感染していることを初めて知ったときの想いについて、感染者にインタビューした。しかし、実際に調査をしなくても、どのような概念が抽出されるかは、おおよその見当はつくだろう。「自己の死への恐れ」、「社会的差別への危惧」、「子どもの将来への不安」、「配偶者への怒り」など、一般的に思いつくのではないだろうか。日本とは異なる文化の国でさえ、何故そんなことが類推できるのだろうか。

調査をせずともある程度の予想がつくと言うことは、「常識としてその概念が社会的に共有されている」ことを示すものと考えられる。すなわち、その社会に所属する人たちの認識構造が、その現象については同一か同型であるために、予測が可能となると考えることができる。このように、「そんなことは分かっている。当たり前だ」ということは、社会的にみて、認識構造の同一性/同型性の証拠ではないだろうか。ただし、特別な経験（HIV感染など）の有無により、認識構造に相違が生じると考えられるので、プラス・アルファの概念を見いだせなければ、実際の研究は価値がない。

5. エビデンスと研究結果の一般化可能性

量的研究でのエビデンス水準の高低は、標本データを統計学で解析し一般化するために要求される「データの代表性」に依存している。このため、対象者に複数の治療法や処理を無作為に割り付ける研究デザインによる研究結果が、科学的なエビデンスとしてレベルが高いものとして扱われている。このように、科学的エビデンスとは研究結果の一般化可能性と同等である。

インは結果の普遍化の方法として、質的研究の結果から得られる理論を拡張する「分析的-一般化」と、母集団の標本から得られる結果からの母集団特性の推論を行う「統計的-一般化」を区別する必要があることを指摘している¹²⁾。すなわち、質的研究の結果の一般化に関しては、統計学が要求する条件とは異なる判断基準が必要である。

すでに述べたように、質的研究では研究者と情報提供者の認識構造の同一性または同型性を暗黙の前提としている。これは、ある現象に関して社会における認識構造が共有されていることを前提とすることと同じであり、どの個人であれその認識構造は「母集団を代表」していると考えられる。

さらに池田が指摘するように、データに基づく帰納法では「一回起性の出来事には、あらかじめ共通な事実が含まれている」という前提があり¹³⁾、質的研究も例外ではない。

これらの前提についての共通理解が成り立ち、研究者の認識構造が母集団を代表しているとすれば、言語の信憑構造からその研究結果は一般化可能性をもつことになる。

このように、質的研究も科学的エビデンスをもたらしことになる。しかし、そのレベルはどのような基準で判断すればよいのだろうか。構造主義科学論からは、すでに述べたように、問題となっている現象に対して、どれだけ説明可能かという点（現象への整合性）で、一般化の程度を評価すべきである。

一方、西條は質的研究の結果について、「関心相関的継承」と「アナロジーに基づく一般化」という考え方を提唱している¹⁴⁾。一回起性の現象であっても、関心相関的に結果の継承は可能であり、それが異なる現象であったとしても、アナロジーによりその結果を継承することは可能である。したがって、ある現象に関して、より現象を説明できるようなモデルを構築していくためには、継承とアナロジーの考えは重要である。

質的研究の方法論は、その結果の一般化可能性を高めるためには、理論的飽和や理論的サンプリングなどの手続きを適切に行うことも必要とされる¹⁵⁾。質的研究のプロセスの多くは、確かに主観的であるが、一定水準以上の能力をもつ研究者ならば、ほぼ似たような結論に達するのではなかろうか。研究結果の信憑性を高めるためには、研究プロセスの明確な記載やテキスト解釈プロセスの適切な開示などの努力がさらに必要とされる。

引用文献

- 1) 西條剛央 構造構成主義とは何か - 次世代人間科学の原理, 北大路書房, 2005, 51-81。
- 2) 西條剛央 質的研究論文執筆の一般技法 - 関心相関的構成法, 質的心理学研究 第四号, 2005, 186-200。
- 3) 西條剛央: 構造構成主義とはどのような理論か - 今, その深化を問い直す, 現代のエスプリNo.475, 至文堂, 2007, 215-227
- 4) 池田清彦, 構造主義科学論の冒険, 講談社学術文庫, 1998, 14。
- 5) 池田清彦, 構造主義生物学とは何か, 海鳴社, 1988, 268-271。
- 6) 竹田青嗣: 哲学の再生, 現代のエスプリNo.475, 至文堂, 2007, 95-105。
- 7) 竹田青嗣, 言語的思考へ - 脱構築と現象学, 径書房, 2001, 110-136。
- 8) 竹田青嗣: 前掲書 8, 128。
- 9) 竹田青嗣: 前掲書 8, 166

- 10) 丸山圭三郎, ソシユールの思想, 岩波書店, 1981, 92-116。
- 11) 池田清彦, 前掲書 5, 93-94。
- 12) Yin, RK: Case Study Research 2/e, Sage Publications, Inc., 1994 / 近藤公彦訳, ケーススタディの方法 第二版, 千倉書房, 1996, 43-53。
- 13) 池田清彦, 前掲書 4, 31-34。
- 14) 西條剛央, 前掲書 1, 163-172。
- 15) 戈木クレイグヒル滋子, グランデッド・セオリー・アプローチ-理論を生み出すまで, 新曜社, 2006, 139-144。